

台湾茶の歴史を訪ねる 第十六回

(16) 初期台湾茶業に貢献した日本人
～藤江勝太郎と可徳乾三（2）

須賀 努（コラムニスト／茶旅人）

今回は藤江の人生と可徳の一部を紹介して紙面が尽きた。今回は九州茶の恩人、可徳のシベリア、そして台湾行にスポットを当て、藤江との関係についても紹介していきたい。併わせて、なぜ磚茶という茶を製造する必要があったのか、その背景と台湾についても少し触れてみることにした。

漢口からシベリアへ

可徳乾三と藤江勝太郎はほぼ同じタイミングで漢口に茶業留学していたと思われ、この時代にあって、同じ目的を持った日本人茶業者同士（しかも双方ともに日本国内では既に有名な存在だった可能性もあり）であれば、何らかの接点が生まれるのはほぼ必然であり、この二人は少なくともこの異国の地で出会っていた、と筆者は勝手に考えている。それが後に台湾での再会？に繋がっていくことになるのであれば、何ともドラマチックな展開だが、それを示す資料は現時点では全く見当たらない。

漢口から帰国後、1889年に遠江国三方原（現在の静岡県浜松市）に紅茶伝習所が開設されたが、その教師として可徳が招かれていることも注目値する。わざわざ茶業の本場静岡が製茶教師を外部から招聘していることから、既に全国的にその名が知られる存在であったことは十分に推測できる。

実は既に述べたように藤江勝太郎は静岡に日本烏龍紅茶会社を設立しており、その藤江を差し置いて九州からわざわざ招聘されたのは、よほどの実力が認められていたからだろうか、静岡にはない新技術を持っていたからだろうか。はたまた藤江自身の引きがあったのだろうか。

因みに三方ヶ原と言えば、戦国時代、上洛する



湖北省漢口 東方茶港の碑

武田信玄を徳川家康が迎え撃って惨敗した場所ではなかったか。そのような場所で製茶が行われていたことも興味深い。今は茶業が行われているのだろうか。是非日本でも有数の優良茶を産する浜松を茶旅したかったが、今回は残念ながら間に合わなかった。

1894年、可徳は、元農商務省次官で、明治政府の殖産興業を政策立案し、実践した中心人物、前田正名の呼びかけで設立された九州茶業会に加わって活動の幅を広げていく。前田は京都の養蚕業などと並び、九州の茶業の将来性にも目を付けており、その当時九州茶業界で名を馳せていた可徳と結びついたことになる。

前田が高橋是清に贈った言葉が伝わっている。「わが為には苦勞はせぬが 恋し日本に苦勞する

たった一つの糸柱 それに並んで茶の柱 あぶない日本のその家に 四千万のこの民が 住まいするの知らないか 前田正名」これを見る限り、かなり志の高い人物に見受けられ、同時に養蚕と茶業を柱と考えていたことが分かる。

全くの余談ながら、この前田正名に心酔し、彼の殖産興業、地域振興を説く全国行脚に同行した人物がいた。若き日の三好徳三郎である。三好は京都の老舗である辻利の出であるが、かなり奔放な生き方をしており、その中で前田に出会い、その精神を含めた産業政策など、多くの教えを学んだという。

更には前田に同行する中で、伊藤博文、山形有朋、松方正義、樺山資紀などの知遇を得ており、辻利の販路開拓のための台湾進出にも大いに役立ったはずだ。後には一介の茶商ではなく、『台湾の民間総督』と呼ばれるまでの存在になったのも、きっかけは前田との出会いだったことは間違いない。台湾で名を馳せた三好徳三郎と九州茶の可徳乾三は、後に同時期を台湾で過ごしている。共に茶業に携わった2人、彼らは前田正名のことなど、何かを語り合う機会があっただろうか。そして最後はどちらも台湾で亡くなっている。



日本時代 台北 辻利茶舗

ロシア市場開拓へ

可徳乾三は1896年、九州茶業会の委嘱を受けてシベリアでの販路調査に出掛けている。同行者は同じ熊本県人の中川正平、阿倍野利恭ら。ウラジオストク、ハバロフスク、ニコライエフスク、イルクーツクなどの各都市を視察した。ロシアは自国にはほぼ茶園を持たない、世界でも最大級の茶葉消費国であり、常に茶葉輸出の一大市場と目されていた場所である。清朝が弱体化したその時、日本からの茶葉、特に中国風紅茶及び磚茶輸出に商機を見出したのではなかろうか。

尚中川正平は熊本県山鹿の出身。可徳同様、初期に紅茶伝習所で紅茶製法を学び、紅茶輸出では可徳のパートナーにもなってシベリア市場開拓に努めている。1899年には可徳らと肥後製茶合資会社を設立し、自ら社長兼工場長に就任。同時にそれ以前から緑茶製造にも力を入れており、『岳間茶』をブランドに押し上げ、国内の製茶品評会で度々入賞するなど、こちらは熊本茶業の恩人と呼ばれ、後世に名を遺した人物である。可徳の名が後世埋もれてしまったのは、このような分り



中川正平氏



キャフタ モンゴル ロシアの茶貿易ゲート



キャフタ博物館に残る磚茶

やすい実績がなかったからだろうか。

更に可徳は 1898 年に再度自費でロシアに渡り、シベリアからモンゴル一帯を巡り、紅茶や磚茶の売り込みを図り、成果があったと言われている。この時茶業組合中央会議所からウラジオストク出張所常務員を委嘱され出張所を開設、国産紅茶の販路拡大に大いに努めている。この頃には既に可徳乾三の名は日本茶業界に響き渡り、静岡のアメリカ向け緑茶に対して、アジア大陸向けの九州紅茶が勃興していった。東の大茶商、大谷嘉兵衛と並び称されることすらあったという。まさに可徳は明治期の九州茶を支えた人物、恩人であったといえるのではないだろうか。

ところで当時のロシア、シベリア地域の茶事情とはどんなものだったろう。シベリア地域で茶を飲む習慣が普及したのは、1727 年に清朝とロシアが結んだキャフタ条約以降のことと考えられる。この条約の結果、福建省の紅茶などの他、湖南・湖北で作られた、輸送に便利な磚茶がシベリア経由で運ばれるようになり、いわゆる万里茶路は茶のシルクロードとなっていく（万里茶路は 1905 年のシベリア鉄道開通により、その役割を終えたと言われており、ちょうど可徳らが売り込んだ直後のことであった）。

この万里茶路の開通により、遊牧民にとって携

帯が便利で、肉の消化にも役立ち、ビタミンなども摂取できる磚茶の普及が進んだ。これが習慣化し、後には磚茶がなければ生活できないという程に普及していくが、ロシアにはほぼ茶畑はなく、全てを輸入に頼らざるを得なかった。そこに茶畑を持たない、世界でも最大級の市場があったのであり、茶商はそこへの売り込みに余念がなかった。後発の日本茶業もこの市場への食い込みを常に狙っていたのである。

可徳の転機

1900 年前後、九州とシベリアを行き来していた可徳は、茶の輸出に尽力するとともに、自らも紅茶や磚茶の製造を行い、シベリアでの商売を広げていたという。だがその時期は数年前に日清戦争があり、その後の三国干渉、ロシアの中国東北部への進出など、政治・外交的には極めて難しい局面であったはずだ。可徳はこの時勢を一体どのように読み、貿易を展開したのであろうか。

可徳はウラジオストク出張所に阿倍野利恭を支配人として置いて活動した他、ハバロフスクには独力で可徳商店を開き、支配人として同じ熊本出身の西峰次に店の運営を任せ、語学や貿易の実務研修のために渡航していた 4 名の青年に、紅茶や磚茶の輸出業務をさせていた。この可徳商店で働



ロシア ウラジオストク駅



モンゴル 信仰の供え物としての茶

いていた若者は、可徳の親戚であった工藤左一らが郷里で設立した合志義塾出身者であり、可徳は単なる商人ではなく、人を育てることに重きを置いた、教育者、指導者であったとも言われている。

可徳自身は九州のため、日本のために茶葉を売るといふ目的のみでシベリアに進出していたと思われ、政治的、外交的な意図はなかつただろうと筆者は信じている。だが阿倍野利恭には対口諜報活動という茶業以外の目的があったと言われており、そのあたりの事情は熊本出身で京都大学名誉教授の山室信一氏の『アジアびとの風姿』（人文書院）の中に、詳細が書かれている。日露戦争前夜のシベリアで茶が絡んだ熾烈な歴史が展開されていたとすれば、それはそれで実に興味深いアナザーストーリーであろう。

因みに阿倍野は日露戦争に従軍し、その後熊本に戻り、熊本県茶業組合長や九州磚茶株式会社を創業、可徳と共に紅茶や磚茶の輸出再興を計ったが、残念ながら失敗に終わったらしい。彼は単に可徳を利用して諜報活動を行っていた訳ではなく、九州の茶業にも尽力していたことはこの点からも窺われるが、その辺の細かな事情を現在つかみ取ることはかなり難しくなっていると云わざるを得ない。

可徳にとって不幸だったのは、日露が戦闘状態

に入ったこと。当然ながら商売は停滞して、在留邦人も皆引き揚げてしまう。戦後に再起を図るために、ロシア、モンゴル、中国を駆け巡るも機を逸しており、またもや資産を失ってしまう。そんな可徳が最後に辿り着いた先が台湾だったのだ。

藤江と可徳の関係は

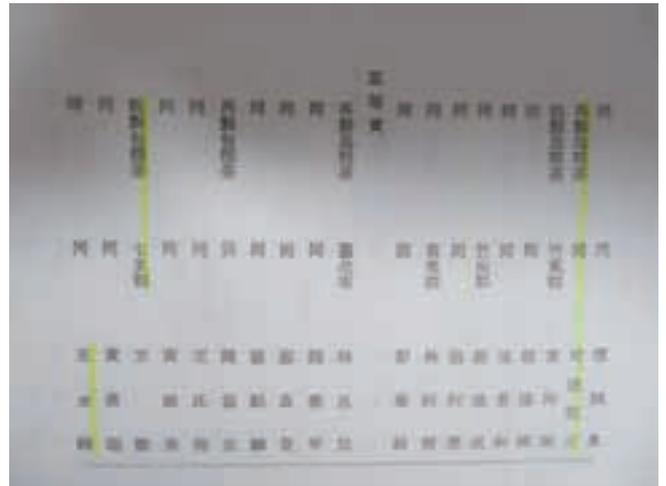
なぜ可徳乾三は台湾に渡ったのだろうか。その記録は見付かっていないが、個人的には台湾の製茶試験場を立ち上げた初代場長、藤江勝太郎との関係ではないかと、勝手に睨んでいる。シベリアの茶業が破たんし、その挽回が難しくなっていた可徳に、台湾での紅茶製造の仕事で手を差し伸べたのは藤江であると考えられる。

それは製茶試験場を出て、実質的に藤江が立ち上げた日本台湾茶株式会社に入社したという事実だけでもその関係性は十分に見て取れるのではないだろうか。恐らくは藤江は可徳の製茶技術を十分に認めており、自らが心血を注ごうとした台湾での紅茶事業に欠かせない人材として招聘したに違いない。

台湾時代の可徳に関する資料は殆ど残ってはいないと考えられる。ただ日本台湾茶株式会社に入社した可徳について、同時期に同社で販売担当として働いており、後に台湾中部魚池に渡辺茶園を



台湾 桃園 日本台湾茶株式会社があった付近



1922年 全台湾製茶コンテスト 2等賞

開き、アッサム種による紅茶製造を試みた渡辺伝右衛門が以下のように書き残している（既に連載第2回で引用しているが再掲）。

『社内の最年長、そして紅茶製造の第一人者であった可徳乾三氏は台湾紅茶製造の新境地を切り開いた。その萎凋・発酵方法は中国式製法を援用しているが、可徳氏の製法は独特で、海外市場での売値は平均より高かった。茶葉は台湾北部の在来種を使って紅茶を作っていた』という。

その可徳独特の製茶法とは一体どんなものだったのだろうか。前述したあの漢口で編み出したという『袋踏法』のことなのだろうか。紅茶や磚茶に高い製造技術を持っていた藤江と可徳は、お互いにこの新会社で、製法に関する熱い議論を交わしたのだろうか。それとも藤江は経営者に徹して、製造は可徳に任せただろうか。

ただ残念なことに、藤江と可徳が台湾で一緒に働いた期間は1年にも満たなかったようだ。既に藤江の項で述べた通り、その紅茶製造は何らかの理由で失敗し、藤江は失意のうちに帰国してしまった。二人はこの間、どのような言葉を交わしたのだろうか。可徳が止まないシベリアへの茶の輸出を強く語り、藤江がそれを受け止めていたのだろうか。

可徳は同社で6年間勤務後、定年退職して安平

駅（現在の埔心駅）前に梅花園という茶舗を開いた。自ら紅茶を作り、その品質は日本内地にまで評判になっていたらしい。一方で1922年に茶商公会が全台湾規模で実施した製茶品評会で、再製烏龍茶という部門で二等賞を獲得している。恐らくこれは隠居老人の趣味で作られたものだと思うが、やはり彼は生涯製茶の人だったということだろう。

日本での磚茶の歴史

ところで九州では、いや日本ではいつから磚茶というものが作られていたのだろうか。静岡県茶業史によれば、日本磚茶製造の始まりは明治初期、日本紅茶の祖とも呼ばれる多田元吉が磚茶製造機を中国から持ち帰ったこととしている。東京磚茶商會が設立され、ロシア向けに販売されたのが1880年だと言われている。

その頃、熊本県は県内にあった豊富な山茶を利用して、中国風紅茶及び磚茶製造を奨励し、伝習所を通じて農家に広め、その費用補助も行ったという記録があるが、それは前田正名の提唱した地域振興策の一環であろうか。そして可徳の提言によるものかどうかは定かではないが、少なくとも中心的で、重要な役割を担っていたのが彼であることは十分に考えられる。日露戦後には九州磚茶



湖北省 現代の磚茶製造機械

株式会社が設立され、九州茶が輸出された様だが、品質問題と代金回収問題などでうまくは運ばなかったようだ。

大正時代に入り、1910年代全国でまた磚茶作りが始まる。1917年には静岡でも静岡磚茶会社が設立されている。ところがロシアに革命が起こり、また日本でも物価高騰でコストが上昇するなど、この磚茶事業もうまくは行かなかった。この頃蒙古では磚茶が貨幣の代わりになる価値を持っていた、などという記述に遭遇すると、その必要性が理解できる。

余談ながら、司馬遼太郎は『草原の記』の中で、『清国商人は、茶をモンゴル人に売ることによって、遊牧という金銭無用のくらしのなかに貨幣経済を注入した』といい、『かれら（モンゴル人）は茶を得るために、清国人の高利貸から、羊などを担保にして金を借りることになる。・・・多くのモンゴル人は、牧畜という、唯一のよるべをうしなって流浪した』と記している。

そして中国に辛亥革命が起こった際、モンゴル

は独立を宣言してロシアを頼ることになる。更に司馬は『かれらが社会主義をえらんだ（1924年に世界で2番目の社会主義国家設立）のは、マルクスのいう歴史の発展の結果ではなく、ただ漢人から草原を守りたかっただけ』と述べている。そこにはこの遊牧民の恨みとの関連が窺われ、その原因に茶が関与していることは注目すべきことではないだろうか。

1937年の日中戦争勃発後、蒙古地区を抑えていた日本軍は、この地区の磚茶需要を満たすため（磚茶を飲まない和生活できないという人心を掌握するため）、静岡に東亜製茶、宮崎に昭和産業宮崎製茶所という国策会社が作られ、磚茶製造が行われたという歴史がある。1942年には1500トンもの輸出があったとの記録もあった。

戦局がひっ迫した1943年には台湾にも台湾磚茶株式会社が設立され、満州向けに茶葉を輸出していた茶業者が中心となり、磚茶の製造が始まったという。正直この会社の詳細は不明であるが、茶商公会のメンバーが名をつらねている国策会社には違いなく、1945年に終戦を迎えると、台湾茶葉企業という会社に引き継がれ、その役割を終えたようだ。尚この台湾茶葉企業が1949年に茶業誌に出した広告を見ると、『磚茶の内外貿易及び委託加工を行い、磚茶製造所を有している』となっているから、台湾でも相応に磚茶が作られた時期があるのかもしれない。

一般には殆ど知られていないが、磚茶とはロシア・シベリアという魅力的な大市場を攻略する一大商品であり、またモンゴル向けの戦略的物資であり、世界の変動と茶の歴史が密接に絡み合っており、何とも興味深く、その話は尽きない。